

野鳥だより

—北海道—

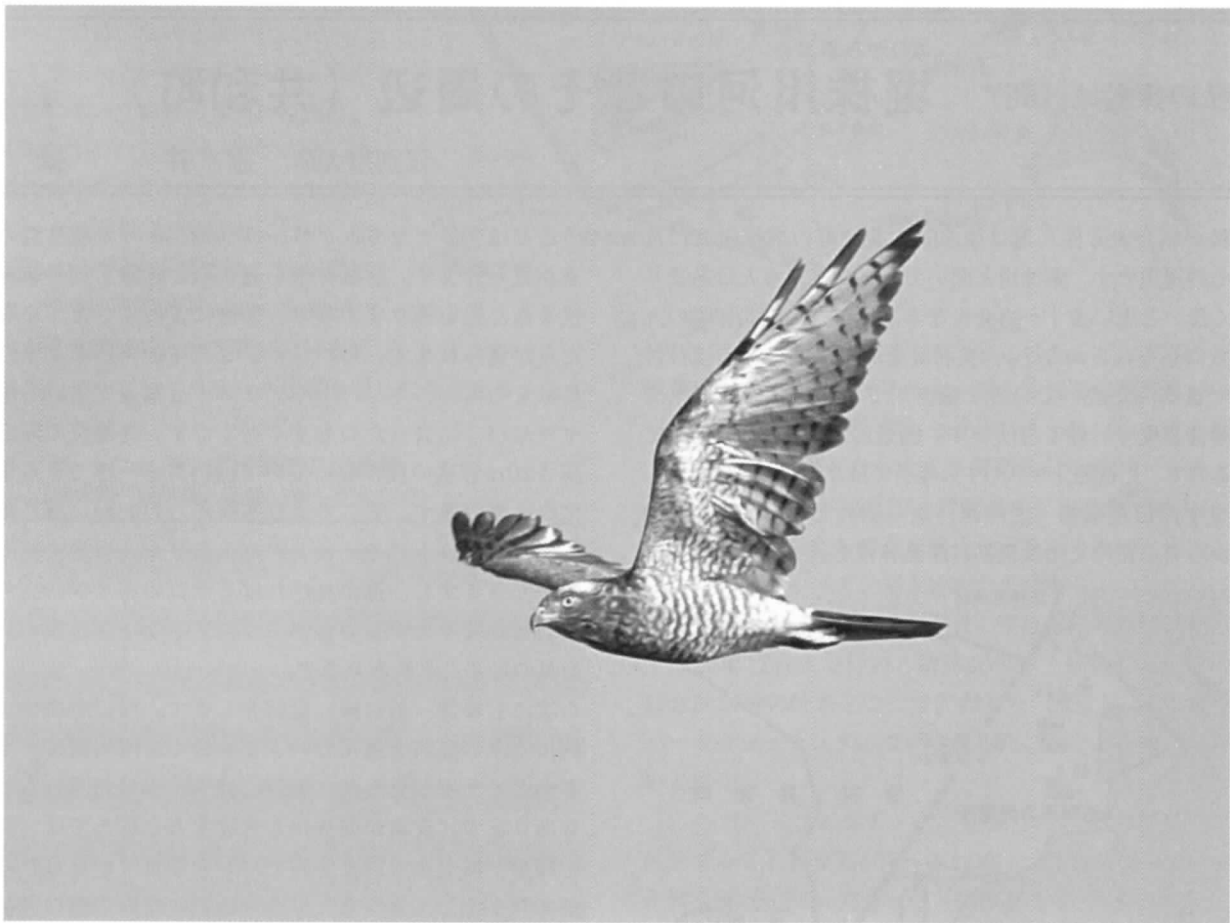
ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第163号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成23年3月21日

サシバ



2010. 9. 25 室蘭測量山

撮影者 新城 久 (札幌市北区)



も く じ

私の探鳥地 (58) 堀株川河口とその周辺 (共和町)	江別市大麻 蓮井 肇	2
札幌市中心部の豊平川バードウォッチング	札幌市豊平区 戸津 高保	3
絶滅が危惧されている天売島の海鳥 ウミガラス、ウミスズメ、ケイマフリ	北海道海鳥センター 長谷部 真	7
北海道におけるクロツグミの繁殖期の分布	美唄市 藤巻 裕蔵	10
アポイ岳高山帯におけるウズラの観察記録	さっぽろ自然調査館 丹羽 真一	11
コアカゲラの分布と生息環境	北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳	12
探鳥会ほうこく		14
鳥民だより		15
宿泊探鳥会のお知らせ		15
探鳥会あんない		16

ほりかっぶがわ
私の探鳥地 (58) **堀株川河口とその周辺 (共和町)**
江別市大麻 蓮井 肇

私が紹介する探鳥地は後志管内共和町の堀株川河口及びその周辺です。堀株川と聞いてもピンと来る人はあまり多く無いと思いますが(そんなことを言ったら共和町の人たちに怒られるかな?)、共和町を流れて泊村との境目付近で日本海に注いでいる2級河川であり、札幌から車で2時間程度で行ける場所です。国道229号も近くを走っているため、比較的分かりやすい場所ではないかと思えます。

まず河口左岸側(岩内側)から紹介します。国道229号から河口左岸までは最初に防風林帯を歩いていきます。



堀株川地図

ここではアカゲラやコゲラ、カラ類といった森林性の鳥達が見られます。防風林帯を過ぎると林縁と畑や草地に挟まれた道を通りますので、季節によってさまざまな鳥たちが見られます。ヒバリやノビタキといった草原性の鳥はもちろん、キジバトやアリスイモも常連です。冬場にヤマヒバリに会ったのもすぐ近くです。終着点の河口は高さ20m程度の崖になっていて岩内湾を一望できるようになっています。ここでは日本海からの向かい風に乗って飛んでくるトビやオオセグロカモメを人目線で見ることができ、運が良ければミサゴのダイブに立ち会うこともできます。沖合いにウミアイサや海鴨類の群れを見つけることもあります。

次に右岸側(泊村側)を紹介します。河口右岸へは堀株川支流の堤防を進んでいきますので、河川側はアオサギやダイサギが見られ、畑側にはチュウヒが現れることもあります。支流が堀株川と合流するところでは、流れが緩やかになっていますのでパンの子育てが見られる年がありますし、カワセミや淡水鴨類、対岸の崖の木に留まっているミサゴを見つけることもあります。

そこから徐々に草地から砂地になり河口右岸は砂浜となっています。砂浜では数は多くないですが、シギ・チドリ類に会うことがありますし、砂浜後ろの小さな崖にシヨウドウツバメのコロニーが出来ることもありますので、砂浜のチェックも忘れられません。又、ノスリのホバリングや季節はずれのオジロワシに出会うのもなぜか右岸です。

このように堀株川河口付近は川、海、森、草原と多様な環境が存在する場所ですので、運にめぐまれると多種の鳥を観察することができる楽しい場所だと思います。

札幌市中心部の豊平川バードウォッチング

札幌市豊平区 戸津 高 保

私は上流はミュンヘン大橋から下流のJR苗穂鉄橋まで、札幌市中心部を流れる豊平川で毎月2回バードウォッチングをしている(図1)。自転車で豊平川右岸のサイクリングロードを走り、ここで観察した野鳥を記録している。この観察は平成22年12月で20年を超した。

このウォッチングを始めるきっかけとなったのは、私の在職時代に行ったバードウォッチング授業である。私が以前勤めていた高校の理科の授業で、生徒達と共に学校から豊平川の川岸(南大橋と幌平橋の間)に行き、鳥を観察した。この授業は毎年6月に行い、昭和63年から平成13年まで、14年間続けた。自分たちの身近にどんな鳥がいるのかを生徒達に知って貰いたいと思い、このバードウォッチング授業を行ったのである。この

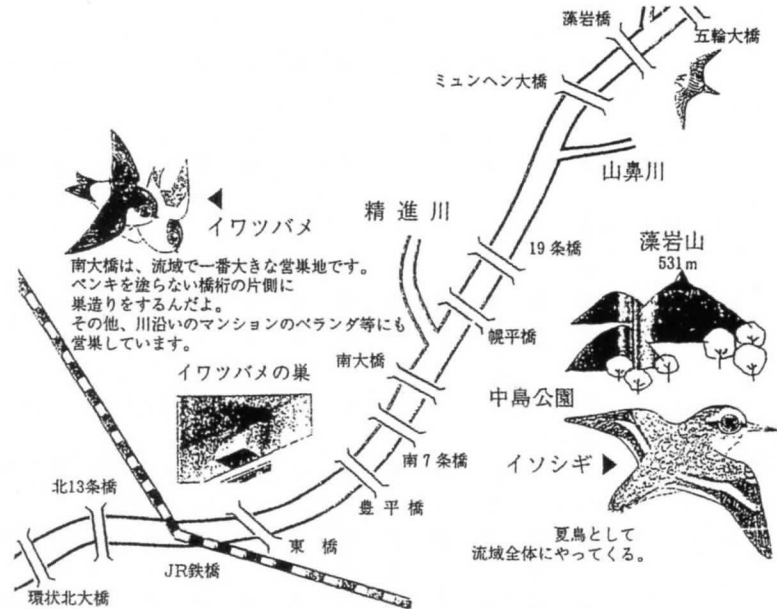


図1 豊平川バードウォッチング地図

表1 バードウォッチング授業での記録種
(南大橋～幌平橋、昭和63年～平成13年)

	63	平	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
トビ			○	○					○				○		○
チゴハヤブサ						○									
マガモ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コチドリ										○				○	
イソシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オオセグロカモメ												○	○		○
ウミネコ														○	
キジバト									○						
アマツバメ	○				○										○
ヒバリ	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○
イワツバメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハクセキレイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モズ	○														
アカハラ													○		
コヨシキリ	○	○													
メボソムシクイ	○				○	○						○	○		○
センダイムシクイ					○										
シジュウカラ			○						○					○	○
アオジ	○	○										○		○	○
カワラヒワ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コムクドリ															○
ムクドリ	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハシブトガラス			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ドバト	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

授業は生徒達に好評であった。彼らも野鳥に興味を持っていると思ったのだが、実は生徒達にとっては教室から解放されるのが嬉しかったようである。このバードウォッチング授業の14年間で27種の野鳥を記録した(表1)。そこで観察した鳥たちの季節変化などを知りたいと思い、豊平川バードウォッチングを始めたのである。

豊平川バードウォッチングは、平成2年6月に開始して平成22年12月まで行い、結局20年以上継続した。この間に合計74種の野鳥をここで記録した(表2)。この豊平川バードウォッチングについて感じたことなどを書いてみたいと思う。

このバードウォッチングで記録した74種の野鳥を渡り区分で見ると、夏鳥40種(54.0%)、留鳥22種(29.7%)、冬鳥7種(9.5%)、旅鳥5種(6.8%)であった。

以前には札幌市中心部で見られなかったマガモとオオセグロカモメが、現在ではここで1年中見られるようになった。この点については“野鳥だより142号”で詳しく触れているので、ここでは簡単に書いておきたい。

おそらくマガモは、札幌市中心部に居つてから30年を超すと思われる。オオセグロカモメは、私の豊平川観察の記録から平成7年にここに現れ始め、平成12年からは1年中私の観察区域の豊平川で見られるようになった。また平成13年からは、札幌市中心部のビルで繁殖が確認された。平成22年には、札幌市内(主として立体駐車場ビルの屋上)で51の巣が確認されたそうである。札幌生ま

表2 豊平川バードウォッチング年別出現種 (平成2年～平成22年)

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	季節性
カイツブリ																●		●		●	●	夏
ウミウ													●	●	●	●		●	●		●	留
ダイサギ									●													夏
アオサギ							●		●		●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	夏
ハチクマ														●								夏
トビ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
ハイタカ	●														●			●				夏
オオタカ								●							●		●					留
チゴハヤブサ	●	●	●	●		●	●		●	●		●	●	●	●	●	●			●	●	夏
ハヤブサ								●		●		●	●	●		●	●	●	●	●	●	留
オシドリ		●																				夏
コガモ		●					●			●							●	●	●			冬
マガモ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
カルガモ		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
オナガガモ		●															●					旅
キンクロハジロ							●															留
スズガモ		●					●															旅
ホオジロガモ							●					●	●	●	●		●	●	●	●	●	冬
ウミアイサ																						旅
カワアイサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
コチドリ			●				●	●					●									夏
イソシギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
ウミネコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			●	●	●		夏
カモメ			●	●		●	●															冬
セグロカモメ										●	●	●		●			●					冬
オオセグロカモメ							●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
シロカモメ							●			●	●		●			●		●				冬
ユリカモメ			●																			旅
アジサシ		●																				旅
キジバト				●								●				●					●	夏
アマツバメ							●						●	●	●							夏
カワセミ										●								●	●			夏
アカゲラ			●												●	●		●	●	●	●	留
ヒバリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
ショウドウツバメ									●													夏
イワツバメ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
キセキレイ										●		●				●	●	●	●	●	●	夏
ハクセキレイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
ヒヨドリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
モズ		●					●					●	●		●	●		●			●	夏
ヒレンジャク																		●				冬
カワガラス				●								●										留
ミソサザイ												●			●							留
ノビタキ														●					●	●	●	夏
アカハラ																				●	●	夏
ツグミ	●				●	●	●			●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	冬
ウグイス																●		●		●		夏
エゾセンニュウ																					●	夏
シマセンニュウ																			●			夏
コヨシキリ	●		●					●			●	●								●	●	夏
オオヨシキリ									●			●	●									夏
メボソムシクイ				●				●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
センダイムシクイ													●	●			●	●			●	夏

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	季節性	
キビタキ														●				●				夏	
コサメビタキ																					●	夏	
ハシブトガラ										●		●						●			●	留	
ヒガラ																					●	留	
シジュウカラ		●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
ヤマガラ								●					●					●			●	留	
メジロ													●	●			●				●	夏	
ホオアカ	●																				●	●	夏
アオジ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
オオジュリン															●					●	●	夏	
カラワヒワ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
マヒワ				●																		留	
ベニマシコ								●						●							●	夏	
シメ	●	●				●				●											●	●	夏
スズメ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
コムクドリ								●	●	●				●	●	●		●	●	●	●	夏	
ムクドリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	夏
カケス														●								留	
ハシボソガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留
ドバト	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	留

季節性区分 夏:夏鳥、冬:冬鳥、留:留鳥、旅:旅鳥

れのオオセグロカモメの幼鳥は巣立ちすると、いったん豊平川に姿を見せ（全部ではないようである）、次々と海へ移動していくと思われる。

平成20年では、豊平川でのオオセグロカモメ幼鳥の初認が8月24日、終認は9月17日であった。平成21年は、初認が8月10日、終認は9月12日。平成22年は、初認が8月18日、終認は9月12日であった。北海道野鳥愛護会の9月の石狩川河口探鳥会では、海岸にオオセグロカモメの幼鳥が見られるのだが、おそらく札幌生まれの個体と思われるが、どうだろうか…。

平成22年8月18日に幌平橋下流の中州で、オオセグロカモメの成鳥85羽と、今年生まれの幼鳥15羽が観察された。幼鳥は数日すると、そこから姿が見えなくなった。

オオセグロカモメ以外にも夏期にはウミネコが豊平川に現れ、冬期にはセグロカモメやシロカモメが、時々私の観察区域で見られる。しかしオオセグロカモメの相当数が豊平川で年中見られるようになって以降は、彼らの出現が減ってきた感じがする。

他の種類について少しふれてみたい。夏鳥のハクセキレイは、ほぼ1年中私の観察区域の豊平川で見られる。私の観察記録を見ると、ハクセキレイの一部は、ここで留鳥化していると思われる。しかし冬季には（12月～2月）その数は少なくなるようである。セグロセキレイは、この豊平川で当然見られるだろうと思っていたのだが、この20年の観察で一度も現れなかった。豊平川のより上流部では何度も見ているのだが…。観察中何度かセグロセキレイらしい個体を見つけ、追ってよく見ると結局はハクセキレイ

イのみであった。

アオジは、豊平川にヒバリと共に春を告げる鳥の一種であり、ほぼ毎年4月中旬にはこの区域の豊平川に現れ、10月中旬頃にここから姿を消す。私の観察している豊平川でどれほどの数があるのだろうか？平成20年5月に、囀っているアオジの数を確認してみた。囀っていた個体数は私の観察区域で27羽であった。ミュンヘン大橋からJR苗穂鉄橋までを大体6kmとすれば、単純計算だが河畔林220メートルに1つがい（囀っている個体が皆つがいであるとして）が生息していることになる。アオジは4月後半から7月にかけて河畔林で良く囀っている。

マガモとカルガモの雑種と思われる個体が、平成4年1月にここで見られた。私はほぼ同じような個体を青森県の弘前公園で目にすることがある。平成6年の7月から平成8年の6月にかけて、まっ白いカモが何度も豊平橋周辺の豊平川で観察された。このカモは主にマガモと一緒に行動していた。まっ白いカモが私の目の前を飛んだことがあり、一瞬何が現れたのかと驚いたことがあった。このカモはアヒルの野生化したものか、マガモのアルビノなのかと考えたのだが、おそらくその行動からマガモのアルビノではないかと私は思っている。

イワツバメは、私がバードウォッチング授業を始めた昭和63年より以前から、南大橋の橋桁で毎年繁殖を続けていたと考えられる。年によって時期は多少変わるが、毎年4月下旬にはここに姿を見せ、9月初旬ぐらいにここから姿を消す。幼鳥が飛べるようになると、南大橋の周囲を特にたくさんのイワツバメが飛び回った。このイワツバメが

平成20年の6月から突然南大橋で全く見られなくなった。変だと思い、南大橋の橋桁にあるイワツバメの巣を見に行くと、巣のほとんど全部が壊されていた。他の動物の仕業であれば、これほど徹底した巣の壊され方はないであろう。私がそれを実際に見たわけではないのだが、人のいたずら(?)で巣が壊された感じがした。この時以後、平成21・22年とイワツバメはここに帰ってきていない。

平成20年の6月から真駒内公園にあるオープンスタジアムの入口上部にイワツバメが姿を現し、巣作りを始めた。ここには5月までイワツバメが見られなかったので、私は南大橋を追われたイワツバメの主力がここに移動してきたのではないかと考えている。平成21・22年もイワツバメはここで繁殖を続けている。

アオサギは、神経質で人を嫌う鳥という感じがするのだが、私の20年間の観察中に11年間は、この人が多い観察区域の豊平川で記録されている。豊平川に近い中島公園にある池の小さな島に、アオサギがこの数年姿を見せるようになっていた。特別に人慣れした個体なのかと思うが、やはり池にたくさんいるマガモが、アオサギの人に対する警戒心を和らげていると考えられる。

海鳥のアジサシが、私の20年間の観察中にただ一度、豊平川に現れている。平成3年の9月、東橋付近の豊平川であった。なぜアジサシが札幌市中心部の豊平川で見られたのかと、不思議な思いであった。おそらく石狩川を上ってきて、豊平川に入ったのだろうと思われる。その後、平成19年8月に、札幌市豊平区にある月寒公園の池で、魚をねらって飛んでいるアジサシを確認した。アジサシもずいぶん内陸まで飛んでくることがあるものだ。

イソシギは、4月中旬頃から豊平川で見られ、賑やかに鳴きながら水面を飛び回る。私はこの豊平川ウォッチングを始めるまで、ここでイソシギが見られるとは思っていなかった。2羽のイソシギが石の上に向かい合って止まり、羽を広げたり、閉じたりする求愛行動と思われる様子を見せてくれた。ほぼ7月中旬くらいまでは良く鳴くので見つけやすいのだが、その後はびたりと声を出さなくなり、確認が難しくなる。おそらく8月いっぱいまではここで子育てをしているものと思われる。

ムクドリは、毎年私の観察区域に現れている。夏鳥ではあるが、ムクドリの一部は札幌で越冬していて、私の観察記録によると、平成3年以降はほぼ毎年真冬の豊平川でも観察されている。平成9年の12月に幌平橋付近の河原で約100羽のムクドリを記録した。彼らは冬のねぐらをビル街の広告塔裏にとったり、最近は大通り公園のテレビ塔に近い樹木にとったりしている。

カイツブリは、最近(平成17・19・21・22年)南大橋付近の豊平川で冬季に見られるようになった。北海道で越冬する個体も多くなってきたのだろうか? 地球温暖化の影響があるのかもしれない。

冬の豊平川では、カワアイサがこの20年、毎年現れている。夏鳥のイソシギほどではないが、私が豊平川ウォッチングを始める前には、札幌中心部の豊平川でこの鳥が見られるとは思ってもしなかった。大体11月中旬くらいにここに現れ、4月中旬頃に去っていく。カワアイサは北海道では留鳥であるが、豊平川では冬鳥である。また海ガモのホオジロガモが、冬季(1・2月が中心)にここで見られ、平成13年以後はほぼ毎年記録されている。

定期観察時ではなかったが、やはり海ガモのシノリガモが、平成22年5月6日にペアでこの区域の豊平川で観察された。たまたま移動中にここに迷い込んできたのだろうが、北帰の途中とすれば少し遅い時期である。もう1種、ウミアイサが平成22年の4月10日にここで見られた。鳥には飛翔力があるので、思わぬ所に現れることがあるものだと考えさせられた。シノリガモとウミアイサは、この20年でそれぞれ1度だけの観察である。

ハヤブサ2種も豊平川で時々観察される。夏季にはチゴハヤブサが、冬季にはハヤブサが札幌市中心部の豊平川で見られる。ハヤブサは中島公園に近いビルなどにおいて、カラスと空中戦をしたり、とらえた餌を食べていたりする。平成21年5月13日にチゴハヤブサのペアのディスプレイフライトと思われる飛翔を豊平橋の近くで見た。2羽が揃って急上昇や急降下・旋回などをして、大空を縦横無尽に飛び回った。実に見事な飛翔であった。

非常に魅力のある鳥カワセミが定期観察で3回、ここに現れた。カワセミは私の観察区域よりも上流や下流の豊平川でよく見られるようである。ヤマセミは定期観察以外で、豊平川を歩いていた時に水面を飛んだ。平成20年2月に豊平橋付近のことである。おそらく真駒内川から豊平川に下ってきた個体と思われる。

オジロワシも私の定期観察では現れなかったが、それ以外の豊平川ウォークで、何度かここで見ている。主に冬のことが多い。

私の観察区域の豊平川で定期観察以外に確認した野鳥は、ヤマセミ・オジロワシと共に、ノスリ・オオハクチョウ・ヒドリガモ・ホシハジロ・トモエガモ・シノリガモ・ハリオアマツバメ・アリスイ・キレンジャクの11種である。

定期観察で現れた74種にこの11種を加えると、札幌市中心部の豊平川で、私は85種の野鳥を記録したことになる。最近の豊平川を見ていると、この観察を始めた頃よりも河畔林が成長してきている感じがおり、シジュウカラなどのカラ類がこの林でよく見られるようになってきた。毎年6月には、北へ移動中のメボソムシクイがここで特徴のある囀りを聞かせてくれ、センダイムシクイの声もその頃時々聞かれる。

私の観察している豊平川流域の河畔林がより成長して、多くの野鳥たちが住み、移動も出来る連続した森の回廊を形成してほしいものだと考えている。

絶滅が危惧されている天売島の海鳥 —ウミガラス、ウミスズメ、ケイマフリ—

北海道海鳥センター 長谷部 真

天売島にはウトウをはじめとした8種類の海鳥が春から夏にかけて集まります。この中には環境省レッドデータブックで絶滅が危惧されている海鳥が3種（ウミガラス：絶滅危惧ⅠA類、ウミスズメ：絶滅危惧ⅠA類、ケイマフリ：絶滅危惧Ⅱ類）含まれています。今回はこの3種の繁殖状況について紹介します。

ウミガラス

ウミガラスは現在国内では天売島だけで繁殖しています。天売島で1981年には繁殖地に600羽以上のウミガラスが確認されていましたが、1994年には19羽までに減少しました（図1）。ウミガラスは巣穴を持たずに主に崖の「開けた場所」で繁殖するため、捕食者から卵やヒナを護るため多くの仲間が密集して繁殖する必要があります。

しかし、天売島では1994年までに開けた場所で繁殖するために十分な個体群を維持することができなくなり、ウミガラスの繁殖場所は岩のくぼみや狭い隙間などのハシブトガラスやオオセグロカモメなどの捕食者が侵入しにくい「開けていない場所」に限られる（2006-2008年は音声でウミガラスを「開けた場所」に誘引しました）ようになりました（図1）。この結果、ここ10年以上は少ない数で経過し（2010年は18羽）、2003年まで数は少ないものの繁殖を成功してきましたが、2004年に巣立ち数が0になってしまいました。2005年から環境省はウミガラスを繁殖地へ誘引するために、これまで設置してきたデコイに加えて音声装置でウミガラスの鳴き声を流し始めました。2006年にはこれまでデコイによる誘引効果が得られなかった「開けた場所」に50羽のウミガラスが戻って来ました。

しかし、開けた場所でウミガラスを誘引しても捕食者により卵や雛を捕られてしまい巣立ちに至りませんでした。一方で2008年に3羽の雛が「開けていない場所」から巣立ったため、2009年から「開けていない場所」にデコイを設置し音声を流してウミガラスの誘引を行うことにしました。しかし、2009年と2010年は「開けていない場所」でも捕食者により卵や雛が捕食されてしまいました。今後はデコイに誘引効果だけでなく捕食者を侵入しにくくするための配置など新たな



ウミガラス



開けた場所

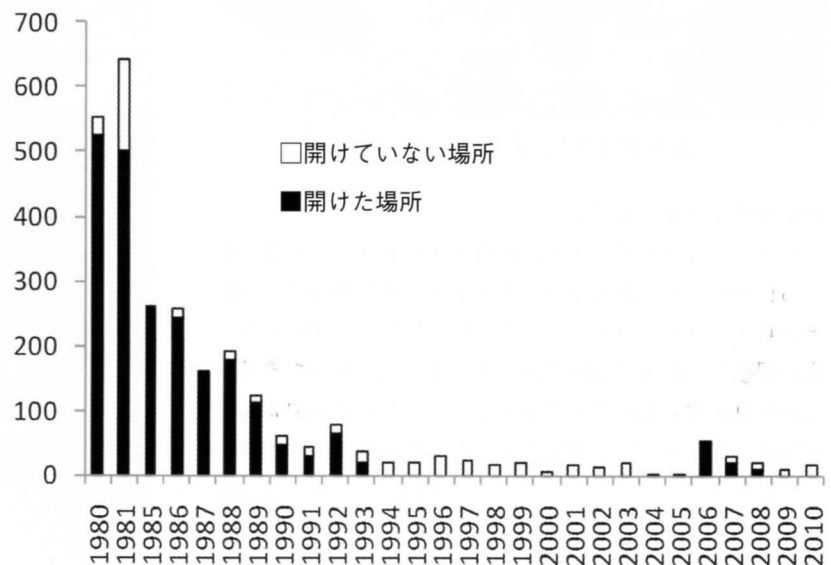
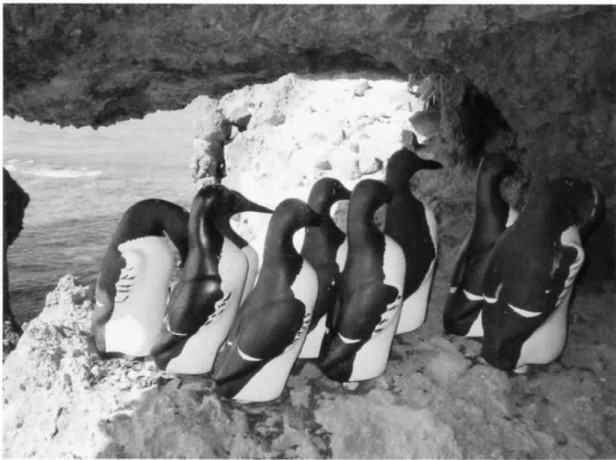


図1 1980-2010年の繁殖地におけるウミガラスの数



開けていない場所



デコイ



卵を奪うハシブトガラスとデコイ



雛を奪うオオセグロカモメ

は知床半島と天売島です。国内では絶滅危惧Ⅱ類ですが、世界的に見ればケイマフリの分布はオホーツク海と日本海沿岸に限られており、ウミスズメ科の中で数は少ないです。

天売島では40年以上前から調査が行われており、減少傾向が続いてきましたが、2010年は前年より大きく増加しました(図2)。ケイマフリは天売島周辺の海で4月から8月上旬にかけて観察が可能で、赤岩展望台の近くの崖

捕食者対策を検討中です。

天売島にあるウミガラスの繁殖地は陸上から見えないところにあります。5月から8月中旬までの繁殖期ですら陸上からウミガラスを見かけることは滅多にありませんが、赤岩展望台から海に浮いているウミガラスを観察できることがあります。繁殖期にボートなど海上からであれば繁殖地周辺でウミガラスを観察できる可能性は高くなります。

ケイマフリ

ケイマフリは国内で北海道と東北地方の一部の島や海岸の崖の岩の隙間で繁殖しています。このうち大きな繁殖地



ケイマフリ

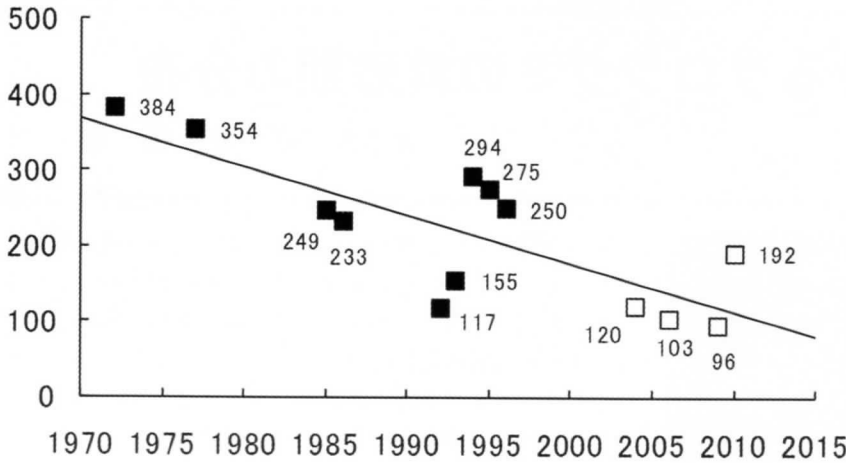


図2 1973—2010年の6月・7月のケイマフリの海上
個体最大数 (■海上からの調査・□陸上からの調査)

でよく観察できるのは5月から7月にかけてです。最も近くから観察できるのはボートなど海上からでケイマフリを間近に見ることができます。羽幌から天売にかけてのフェリー航路では焼尻港へ入る手前と天売港へ入る手前で観察できる可能性が高いです。

ウミスズメ

ウミスズメは国内で過去に天売島と根室のハボマイモシリ、岩手県の三貫島で繁殖が確認されていましたが、ごく最近では国内で繁殖が確認されている場所はありません。

天売島でウミスズメの繁殖が確認されたのは1956年で推定500羽でした。その後、1987年まで繁殖が確認されていましたが(推定100羽)、1994年の卵殻の確認を最後に以後繁殖は確認されていません。1994年には過去に繁殖



ウミスズメ

していた場所が利用されなくなっており、繁殖地や個体数が減少した可能性があります。

1994年以降繁殖の調査は行われていません。調査が行われない理由はウミスズメの繁殖調査の難しさにあります。ウミスズメは完全に真っ暗になってから繁殖地に現れ、夜

明けの明るくなる前に繁殖地を離れてしまいます。抱卵個体は繁殖地に日中も残っていますが、天売島の場合、急斜面または崖の隙間や土壁を掘った穴を巣として利用するため、これを見つけることは難しいです。

もう一つ調査が困難な理由として、ウミスズメが繁殖地にいる期間が短いことが挙げられます。ウミスズメが繁殖地に現れ始めるのはおそらく抱卵開始の4月下旬から5月上旬頃です。ウミスズメは陸上で育雛をしないため、卵が孵化すると2日以内に雛は海へ巣立ってしまいます。雛は海で親にしばらく餌をもらって育てられます。巣立ち

のピークはおそらく5月下旬から6月上旬にかけてで、島周辺でウミスズメが観察されるのは6月いっぱいまで7月以降は姿を見なくなります。このため繁殖確認のための抱卵や巣立ちの調査に適した時期は5月上旬から6月上旬までの短い期間に限られます。

近年天売島でウミスズメの繁殖は確認されていませんが、繁殖期に天売周辺の海で日中に目撃されています。2008年の繁殖期に陸上でウミスズメの成鳥の死体が目撃されました。さらに、2009—2010年の繁殖期の夜間にウミスズメの鳴き声調査(ウミスズメは夜の繁殖地で意思疎通を図るためによく鳴きます)を行ったところ、これまで繁殖が確認された場所以外でも鳴き声が確認されました。これらことから、ウミスズメは天売島の意外と広い範囲で繁殖しているかもしれません。今後の課題は繁殖の確認をすることと繁殖個体群の個体数を把握することにより増減の傾向をつかむことです。

ウミスズメは4月から6月にかけて羽幌から天売にかけてのフェリー航路で目撃されています。天売島では5月から6月の波の穏やかな日に昼間に集落の海岸から200—300m離れた沖合で集団で浮いていることがあるので、望遠鏡があれば姿を確認できるかもしれません。

☆ウミガラス保護増殖事業報告書を海鳥センターのホームページで公開しています。詳しい内容を知りたい方は以下のリンクのPDFファイルをご覧ください。

http://www.3.town.haboro.hokkaido.jp/seabird/ororon_2009.pdf

☆北海道海鳥センターブログ『海鳥日記』(海鳥などの動画も見られます!)

<http://seabirds.exblog.jp/>

☆北海道海鳥センターのホームページ

<http://www.3.town.haboro.hokkaido.jp/seabird/>

北海道におけるクロツグミの繁殖期の分布

美唄市 藤 巻 裕 蔵

北海道で繁殖するツグミ属 (*Turdus*) の鳥類3種のうちアカハラとクロツグミは普通に観察できる鳥であるが、マミジロはそれほど多くない。アカハラの分布については本誌158号で紹介した。今回はアカハラと比べながらクロツグミの分布について述べる。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、カケス (121号) やコムケドリ (130号) の場合と同じなので省略する。2009年までに調査した区画 (4.5 × 5 km) の数は854、調査路数は961で、アカハラの場合と同じである。分布図の作成では全ての記録を用いたほか、各種報告書や論文からの記録も用いたが、生息環境別と標高別の出現率については上記の区画と調査路で調べた結果だけを用いた。

分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のクロツグミの分布を示した (観察結果は5 × 4.5 kmの区画で記録しているが、図では10km区画で表示)。まず、158号のアカハラの分布図と比べながらクロツグミの分布図を見



図1 北海道におけるクロツグミの繁殖期の分布
 一つの区画は約10km四方で、1/25,000の地形図に相当する。
 ●=生息が確認された。○=調査したが観察されなかった。
 ・=未調査。

ていただきたい。アカハラが北海道のほぼ全域に分布しているのに対し、クロツグミは道東や道北で観察されなかった区画が多い。ハイマツ林を除く森林における出現率を日高山脈の東側に限ってみると、アカハラ68%に対しクロツグミ5%と大きな差がある。また北緯44度以北の地域では、観察が行われている区画のうち、アカハラが記録された区画は31%あるのに、クロツグミが記録された区画は15%である。アカハラは南千島やサハリンに普通に生息しているのに、クロツグミは南千島に分布せず、サハリンでは南部で迷鳥としての記録があるだけである。北海道がクロツグミの分布東限・北限となっていると言え、分布図からも分布域の境界に近い道北や道東でこの種が少なくなる状況が読み取れる。

生息環境

生息環境別に出現率 (全調査路数に対するクロツグミが観察された調査路数の割合) をみると、クロツグミがハイマツ帯では出現していない点はアカハラと同じであるが、それ以外の環境ではいずれでもアカハラより出現率が低かった。すなわち、出現率は常緑針葉樹林で29 (アカハラ64、以下同様) %、針広混交林で28 (59) %、落葉広葉樹林で49 (73) %、カラマツ林で21 (88) %、農耕地・林で34 (71) %、農耕地で23 (67) %、住宅地で9 (32) %であった (表1)。このような違いの理由の一つは、道東でクロツグミの出現率が低いためであろう。

標高別の出現率については、ハイマツ林と出現率の低かった住宅地を除いて両種を比べてみる。出現率は、200m以下では26 (55) %、201~400mで34 (75) %、401~600mで12 (67) %、601~800mで0 (52) %、801m~では3 (15) %で、アカハラが比較的高い標高まで生息しているのに対し、クロツグミは標高601m以上にはほとんど生息しない。

道南や道央では高い標高で見

られる植生が、北または東に向かうにしたがって低標高でも見られることが知られている。クロツグミの分布もこれに対応するように標高が高くなるにしたがって、また北や東に向かうのにしたがって出現頻度が低くなっている。

観察个体数
 調査路 2 km 当たり幅片側 25 m の範囲で数えられた平均个体数は、常緑針葉樹林で 0.3 (アカハラ 0.5、以下同様) 羽、針広混交林で 0.3 (0.6) 羽、落葉広葉樹林で 0.5 (0.6) 羽、カラマツ人工林で 0.5 (1.3) 羽、農耕地・林で 0.1 (0.7) 羽、農耕地で 0.1 (0.3) 羽であった。クロツグミの観察个体数は出現率の場合と同じように、いずれの環境でもアカハラより少なく、とくに森林以外の環境で个体数の差が大きかった。このとはアカハラが農耕地のような開けた環境にも生息できるのに、クロツグミ

表 1 クロツグミの生息環境別・標高別の出現率 (%)

生息環境	調査 路数	標高 (m)					全体
		~200	201~400	401~600	601~800	801~	
ハイマツ林	12	—	—	—	0	0	0
常緑針葉樹林	17	71	0	0	0	0	29
針広混交林	153	49	49	15	0	7	28
落葉広葉樹林	197	60	49	6	0	0	49
カラマツ人工林	24	20	18	33	—	—	21
農耕地・林	238	35	34	14	0	—	34
農耕地	279	27	5	0	—	—	23
住宅地	41	8	50	0	—	—	9

はおもに森林に生息することを示していると言えよう。

まとめ

クロツグミは北海道の東部や北部では少なく、おもに標高 600 m 以下の森林に生息しており、森林以外の環境では少なく、アカハラに比べると地理分布、垂直分布、生息環境の幅が狭い。

アポイ岳高山帯におけるウズラの観察記録

さっぽろ自然調査館 丹羽真

普段はもっぱら植物の観察をしている者ですが、ウズラの観察例を紹介させていただきます。少々過去の話になりますが、2008年10月16日にアポイ岳の高山帯で2羽がうずくまっているところを偶然観察しました。通称「幌満お花畑」と呼ばれる場所の近くで、標高約600メートル、ハイマツ群落とダケカンバ低木林の境界付近になります(世界測地系で北緯42度6分9秒、東経143度1分30秒)。日当たりのよい南西向き斜面で、まばらにミヤコザサが生えていました。枯れ草の中では保護色になっていて、気づかずに通り過ぎてしまうところでした。

現地に行かれて見た方もおられるかもしれませんが、幌満お花畑には2004~2008年にかけて気象観測機器が設置されていました。私は機器の設置やデータ回収などで毎年春と秋に登っており、この日は数人で機器の撤収作業に当たっていました。ウズラを見つけたときはなんでこんなところにとおもいましたが、登山道のすぐ脇でじっとしていましたのでコンパクトデジカメで撮影できました。衰弱して飛べないのかとも思いましたが、腕を伸ばしてカメラを近づけたら2羽とも飛んで逃げてしまいました。

当日も前日も晴れて穏やかな天気でしたが、気象庁のデータを見ると、5日前に低気圧が接近し「大風を伴う」荒れた天候になっていたようで、近隣の浦河測候所でそ



ウズラ アポイ岳 2008. 10. 16

れぞれ 26.8 m/s と 20.8 m/s が観測されています。渡りの途中に嵐に遭い、本来の生息環境ではない場所に運ばれてきたのかもしれない。

たまたま藤巻裕蔵先生に写真を見ていただいたところ、本来ならすでに本州への渡りを終えている時期で居残り例かもしれないから記録にとどめておくよう勧められた次第です。実のところ、私が野生のウズラを見たときと確実に言えるのは後にも先にもこれだけですが、愛らしい姿が目には焼きつき、以後関心を持ち続けています。

コアカゲラの分布と生息環境

北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳

(1) 分布について

コアカゲラといえば、道東の鳥というイメージが強い。現に、札幌界隈では観察記録などはあるが、普通に見られる鳥ではない。しかし、日高山脈を越えて、十勝地方に行けば、ちょっとした林でもよく見かけ、珍しい鳥ではない。文献を紐とけば、「主に日高山脈より東部に分布し・・・(藤巻 2010)」とか、「主に道東(旭川市～日高山脈以東)に分布(河井ほか 2003)」などとあり、やはり北海道の東部が主な生息地と言えそうである。もう少し調べてみると、環境省が日本野鳥の会に委託して進めた自然環境基礎調査(鳥類繁殖分布調査報告書)では、北海道の東部のほかに上川地方や宗谷地方にも確認地点が落ちており(環境省自然環境局生物多様性センター 2004)、東部のほかに、「北部」と記述している図鑑もいくつかある(日本鳥類保護連盟 2002、北海道新聞社 1997、Brazil 1991)。

2010年4月8日、仕事で新篠津村を巡回していたときに、偶然コアカゲラを目撃した。場所は新篠津村下篠津の南六号橋(6441-64-18)。河畔林の木のでっぺんで「キイーキイーキイー」と鳴く鳥がいたので双眼鏡で覗いたところ、コアカゲラのメスであった。1分くらいながめてみると、このメスは、同じ木の下の方に移動したので、双眼鏡で追いかけてみると、近くにオスも確認できた。コンパクトのデジカメしか持ち合わせていなかったが、とりあえずメスだけの証拠写真は撮れた(オスは枝の陰で写真は撮れなかった)。しばらくすると、2羽は篠津川の下流方向に飛び去っていった。4月なので、繁殖の始まる時期ではあるが、このあとも何度かこの地域を訪れることは

あったが、営巣などは確認できなかった。

新篠津村でコアカゲラを目撃したことを、周りの鳥仲間にも自慢した。すると埋もれている石狩空知地方の観察情報がいくつか出てきた。文献情報も含めると16件になり、まとめると表1のようになる。ほとんど石狩川沿いに集中している感じであるが、古くは1986年から記録があるようだ。興味深いものは坂元氏の観察情報で、江別市八幡で2010年6～7月に繁殖を確認している。6月5日にコアカゲラを目撃し、その後も何度か同地を訪れ、個体を確認したり、できなかつたりを繰り返している。その後7月2日に巣穴を発見し、翌7月3日にオスの給餌行動を確認している。巣立日の特定はできなかったものの、7月8日には同地でコアカゲラは確認できなかったということである。また何度かの観察の中で、確認できたのはオスだけで、メスを確認していない。

私は、帯広に6年、中標津に2年、根室に4年、釧路に6年と、道東の街を転々とし、2003年から札幌(江別)に住んでいる。帯広では、畜産大学や農業高校の構内の林、街中の緑ヶ丘公園などで何度もコアカゲラを見ていた。しかし、中標津、根室、釧路の12年間では、コアカゲラを見たのは2回だけである(根室市と釧路町で1回ずつ)。この間、鳥の見方は一様ではなく、カラス調査に精を出していたころ、鳥類標識調査に夢中だったころ、分布にこだわり始めたころなど、熱の入り方はときによって違うものの、いつも鳥をみていたことには変わりはない。根室釧路地方では12年間で2回、石狩地方では7年間で1回。はたして、「コアカゲラは主として道東地方に生息する」といえるのだろうか? と疑問をもった。

表1 石狩空知地方におけるコアカゲラの観察情報

観察場所	観察年月日	観察者・出典	メッシュ番号※	備考
新篠津村下篠津	2010年4月8日	玉田克巳	6441-642	オス1、メス1
江別市八幡	2010年6月5-7月3日	坂元直人	6441-534	営巣を確認した
札幌市南区藻岩山 第4トリブルリフト	2010年1月17日	河原孝行	6441-422	メス1、11時ごろ
江別市八幡	2008年4月20日	池田徹也	6441-534	メス(写真あり)
石狩市真勲別	2004年5月24日	石狩鳥類研究会(2005)	6441-624	
砂川市石山 少年自然の家の近く	2003年12月3日	武田忠義	6541-272	メス
石狩市生振防風林	2003年2月10日	石狩鳥類研究会(2004)	6441-622	
石狩市生振防風林	2002年1月3日	石狩鳥類研究会(2003)	6441-622	
石狩市生振防風林	2001年12月16日	石狩鳥類研究会(2002)	6441-622	
石狩市生振防風林	2001年6月17日	石狩鳥類研究会(2002)	6441-622	標識
江別市八幡	2001年	武田忠義	6441-534	営巣を確認したが巣立ちまでは未確認
石狩市真勲別川付近	2000年5月5日	石狩鳥類研究会(2001)	6441-624	
札幌市モエレ沼	1999年4月17日	石狩鳥類研究会(2000)	6441-533	
石狩市生振	1998年	石狩鳥類研究会(1999)	6441-622	
当別町美登江石狩川公園	1986年	武田忠義	6441-631	巣立ち間際にイイズナが捕食
江別市西野幌 野幌森林公園大沢園地	不明	武田忠義	6441-441	

※:メッシュ番号は標準地域メッシュ(JIS X 0410 地域メッシュコード)の5倍地域メッシュ。

帯広畜産大学名誉教授の藤巻裕蔵先生から、道東、道北などの分布情報を教えていただいた。表1のデータもあわせて、これらの確認情報を地図上に落としたものが図1の分布図になる。やはり十勝地方に確認地点が多いが、釧路根室地方や上川地方にも確認地点があり、「道東地域」というよりは、「道東、道北、道央地域」とか、「道南地域を除く北海道の広い地域」という表現が当てはまりそうである。



図1 コアカゲラの分布

さて、つぎに密度について考えてみる。図1の分布図からも、十勝地方は確認点数が多く、密度が高い可能性は何える。釧路根室地方も、確認地点数はある程度ある。しかし、自然環境保全基礎調査の1997-2002年の分布図では、根室地方の確認地点はなく、釧路地方も3地点だけである(環境省自然環境局生物多様性センター 2004)。この調査は、現地調査とアンケート調査の結果を合わせたものであるので、調査努力量は、アンケート調査の部分が一様ではないが、現地調査は各メッシュで行われているので、根室地方で確認地点がないということは、現地調査を実施しても確認できなかったということである。根室地方の鳥類生息状況をまとめた鳥類リストでは、コアカゲラは「少ない(生息しているが、必ず観察できるとは限らない)」とされている(高田 1991、高田 2001)。根室地方ではコアカゲラの密度はあまり高くなさそうで、コアカゲラが主に道東や道北に生息しているといっても、密度の高いところと低いところがあって、一様に分布しているわけではないと考えられる。網走地方や上川地方については、私には現地の状況がよくわからないので、密度についての言及はできないが、これらの地域では、比較的普通に生息している地域もあるようである。

密度については、調査の努力量を考慮する必要がある。ので、断定的なことを述べるにはまだ尚早である。しかし、コアカゲラの生息状況は道東、道北、道央部などに広く分布し、これらの地域の中には比較的普通に見られ

る地域と、あまり見られない地域があると考えられる。

(2) 生息環境について

今回作成した図1の分布図から、GIS(地理情報システム)を用いて、コアカゲラの生息環境を調べてみた。今回用いた分布情報は、標準地域メッシュの5倍地域メッシュと呼ばれるもので、国土院の1/25,000の地形図を緯度経度方向にそれぞれ2等分して得られた、一辺が約5kmのメッシュ情報で、全道3,652区画のメッシュである。

まず、コアカゲラの標高分布について分析したものが図2である。標高はメッシュの平均標高である。コアカゲラは標高800mより高い地域では確認の情報がなく、とくに確認地点が多かった標高は100m以下の地域である。今回得られたコアカゲラの分布情報は、全部で123地点。このうち100m以下の分布情報は91地点であったので、約74%が100m以下の地域で確認されたことになる。ただ、北海道の国土自体が、標高100m以下の地域が多い。そこで、100m以下の国土のメッシュ数を調べると、1,096メッシュになる。全道的にみると、3,652メッシュのうち、コアカゲラの生息していたのは122メッシュであるので、約3%の地域にコアカゲラが生息していたことになる。しかし、100m以下の地域に限ってみると、国土は1,096メッシュあるうち、コアカゲラが生息していたのは91メッシュであるので、標高100m以下の地域では8.3%にコアカゲラが生息していたことになり、このことから比較的標高の低いところを選んでコアカゲラが生息してい

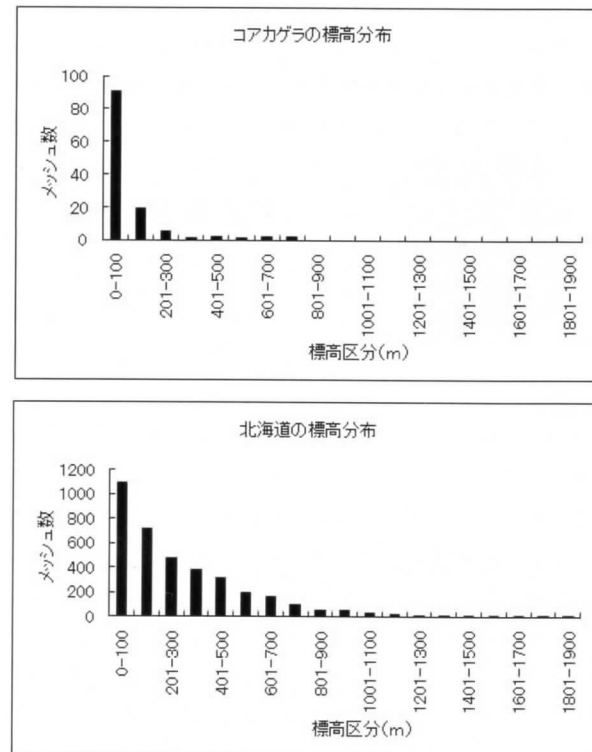


図2 コアカゲラの生息地と北海道の標高分布

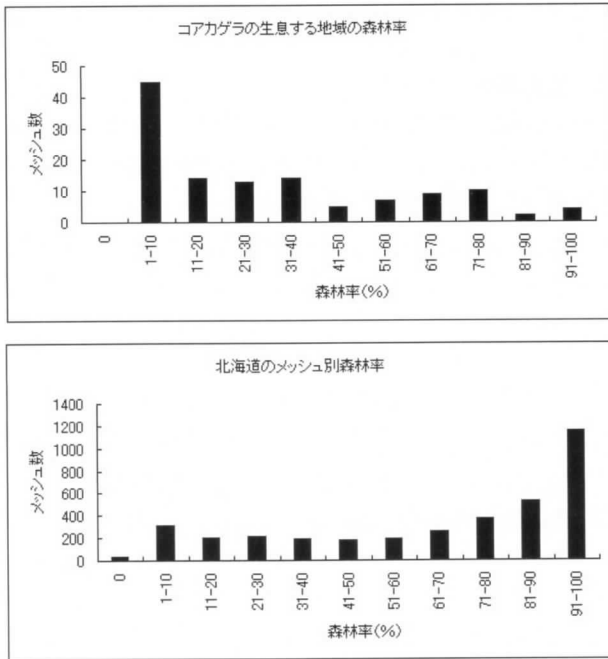


図3 コアカゲラの生息地と北海道の森林率

たことが伺える。

つぎに、植生について調べてみた。環境庁の第5回自然環境保全基礎調査の植生を用いて、5 kmメッシュ内に占める森林の面積割合を算出して森林率とした。森林率が1~10%のメッシュは、コアカゲラが45地点(37%)も確認されており、森林率がこれより高くなるとコアカゲラの確認地点数は15メッシュ以下で多くなかった。国土全体でも、森林率が1~10%のメッシュは311メッシュ(8.5%)しかなく、コアカゲラは森林率の低い地域を好んで生息していたことが伺える。十勝地方の0.2~21.5ha

の防風林や公園などで、アカゲラとコアカゲラの生息状況を調べた山内ほか(1997)の結果では、アカゲラは森林や公園の面積が大きくなるほど生息数が増加する傾向が見られたが、コアカゲラはこのような強い相関は認められなかったことを明らかにしている。今回の分析結果からも、コアカゲラは森林率が低い地域で多く見られており、山内ほか(1997)の結果と同じような結果が得られた。このことからコアカゲラはあまり樹木の多くない環境を好んで生息しているものと考えられる。

文献

Brazil MA (1991) The Birds of Japan. A&C Black, London.
 藤巻裕蔵 (2010) 北海道鳥類目録改訂3版. 極東鳥類研究会, 美唄.
 北海道新聞社 (1997) 北海道の野鳥最新版. 北海道新聞社, 札幌.
 環境省自然環境局生物多様性センター (2004) 鳥類繁殖分布 調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
 河井大輔・川崎康弘・島田明英 (2003) 北海道野鳥図鑑. 亜璃西社, 札幌.
 日本鳥類保護連盟 (2002) 鳥630図鑑増補改訂版. 日本鳥類保護連盟, 東京.
 高田勝 (1991) 根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要5:1-19.
 高田令子 (2001) 根室支庁管内鳥類リスト. 根室市博物館開設準備室紀要15:95-114.
 山内加奈子・山崎里実・藤巻裕蔵 (1997) 農耕・住宅地におけるアカゲラとコアカゲラの営巣条件. 日鳥学誌46:121-131.

子、松原寛直・敏子、村木敬太郎、山本昌子、横山加奈子、吉川茂子、吉田慶子 以上43名
 【担当幹事】戸津高保、横山加奈子



野幌森林公園

2010. 12. 5

【記録された鳥】トビ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ウソ、ハシブトガラス 以上17種

【参加者】阿部真美、井上詳子、内山英晋、太田敏枝、小野寺まゆみ、景安則子、北川博一、工藤一紀・令子、栗林宏三、グローズ千鶴子、後藤義民、小西美美枝、小山久一、今善三郎、坂井伍一、品川睦生、高田征男、高橋きよ子、竹田芳範、立田節子、田中陽・雅子、辻雅司・方子、道場優、戸津高保、豊田正生、中正憲信・弘子、西尾京子、野田貴代子、畑正輔、早坂泰夫、広木朋子、辺見敦

小樽港

2011. 1. 16

札幌市南区 坂田 眞理子

幼女の頃、森の中でギャーというカケスの鳴き声に怯えた記憶があり、それ以来鳥はあまり好きになれなかった。だが年を重ねシャンソンの黒鷲を初めて聞いた時の感動、黒マントを身に着けた黒鷲と夜空の星を採りに行けるそんな想いにさせてくれた音楽から心機一転、更に又、年を重ねてからの山森歩き・山野草・鳥類の出会いは私の人生の軌道修正となり、あらゆる生き物に教えられる事が一杯。これからの小さき者達へのパトタッチでもある事に気がつきました。ましてや今回お誘いいただいた小樽港探鳥会、海辺の鳥観察は初めてでしたので、もしかして港のマリー

に会えるかもと期待もし、小雪降る中、先頭のダンプカーをしてくれた方に感謝し、雪道をこいで観察地点の日和山灯台に祝津港。高い崖から集中観察すると、周りから「オオセグロカモメ」、「アカエリカイツブリ」と声があがり、9種類の鳥類の確認が出来、おまけに空を見上げればオジロワシの幼鳥、崖下の海にトド。高みの見物とは何とワンダブル。場所を次々に移動し、高島漁港ではハシジロアビ、ホオジロガモ等のウォッチング。北浜岸壁ではスズガモ、ハジロカイツブリ等、港町埠頭ではハギマシコ、更に精悍な顔つきのハヤブサまで登場。最終観察地点の貯木場では、想いが叶う事であるのですね、何と期待の港のマリーに出会う事が出来ました。大きくてゆったりとした風情で波に漂っていました。単独行動中のケイマフリです。ワンダブル。30種類の鳥のウォッチングを終え帰路、今度は夏羽のケイマフリの赤い靴下をはいた様な足が見たいという想いがふくらみつつあります。探鳥会の幹事さん、会員さん皆様と、とても楽しい時間を共有出来ました事に感謝です。ありがとうございました。

【記録された鳥】ハシジロアビ、ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、マガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ビロードキンクロ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、カモメ、ケイマフリ、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ハギマシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上30種

【参加者】阿部真美、井上詳子、今村浩子、白田 正、内山純一・雅子、梅木賢俊、岡部良雄・三冬、北山政人、栗林宏三、坂井伍一・俊子、坂田真理子、志田博明・政子、品川睦生、島田陽子、白澤昌彦、高橋良直、高橋きよ子、立田節子、田中志司子、道場 優、戸津高保、中嶋慶子、中正憲倍・弘子、西尾京子、畑 正輔、濱野由美子、樋口孝城、広木朋子、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子

以上37名

【担当幹事】道場 優、畑 正輔、梅木賢俊

鳥民だより

◆総会のご案内

日 時：平成23年4月11日(月) 午後6時30分
場 所：かでの2・7 320会議室
総会終了後に懇親会を予定しています。

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ

<野鳥写真展>

期 間：平成23年5月10日(火)～5月22日(日)
場 所：光映堂2階ギャラリー
札幌市中央区大通4丁目 電話 011-261-0101

なお、展示作業は5月9日の午後6時から、撤去作業は5月22日の午後5時から行う予定です。お手すきの方にご協力願います。なお、この写真展は引き続き6月1日から野幌のふれあい交流館で開催する予定があります。

実施される時は、後日、出展者には再度詳細を連絡いたします。出展者は写真展終了日以降、できるだけ早く出展写真を引き取りにきてください。

<写真募集>

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を添付して下さい。送付は光映堂の小林店長まで。5月10日に直接持参する場合は、事前に連絡願います。出展者には光映堂の本店と地下街店で使える商品券を進呈します。

問い合わせは 小堀煌治 011-591-2836(午後7時～10時)

【新しく会員になられた方】

加納 喜久江 札幌市厚別区

—宿泊探鳥会のお知らせ— 根 室

今回は根室です。海鳥ウォッチング(落石ネイチャークルーズ)がメインです。落石漁港を出発し、ユルリ島、モユルリ島を周遊します。エトピリカやコアホウドリ、フルマカモメなどの海鳥たちが待っています。1隻12名乗りの漁船を4隻貸切にします。



月 日	7月2日(土)～3日(日)
集合場所	札幌駅北口「鐘の広場」
集合時刻	2日午前7時
1日目	足寄、春国岱(探鳥予定)を経て根室へ
2日目	海鳥クルーズ(午前中約2時間)後札幌へ
札幌帰着	3日午後9時頃
定 員	45名
参加費用	27,000円(バス代、宿泊代、クルーズ料金など。食事は2日昼食から3日昼食まで)
宿 泊	ねむろ海陽亭 (電話 0153-22-8881)
申込み先	佐々木 裕 宿泊探鳥会担当幹事 (電話 011-596-2660)
※	6月1日(水)午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。
旅行代金	申込み終了後から6月15日までに下記口座に振り込んで下さい。
	北洋銀行 札幌駅南口支店
	口座名 (株)エイチ・ビー・シー・ビジョン
	口座番号 3790202



- ☀ 探鳥会は悪天候でない限り開催します。
- 👓 双眼鏡などの観察用具、昼食、筆記具、野鳥図鑑などをご持参下さい。
(探鳥地や当日の天候に応じて、防寒具、雨具、長靴などをご用意下さい。)
- ☂ 公共交通機関を利用される場合には、事前に時間などをお確かめ下さい。
- ★ 探鳥会の問い合わせ
(社) 北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭を除く)

開催日	探 鳥 地	集 合 場 所 及 び 集 合 時 刻
4月10日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 午前9時30分
	地下鉄東豊線環状通東駅から、中央バス北札幌線東69番・東79番。「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月17日(日)	宮 島 沼	湖畔 午前10時
	JR岩見沢駅前発、又はJR石狩月形駅前発 中央バス(月形行き又は岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。	
4月24日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	JR新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行)「大沢公園入口」下車、又はJRバス(文京台循環線)「文京台南町」下車、徒歩各5分。 夏鳥たちがほぼ出揃う頃です。緑が萌え始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(木)	藤 の 沢	白鳥園 午前9時
	札幌駅発、又は地下鉄真駒内駅発 定鉄バス(定山溪行又は豊滝行)「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤野マナスル(岡田の山:316m)をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月8日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月24日の案内を参照してください。 夏鳥が勢揃いします。木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月15日(日)	千 歳 川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 午前8時
	交通機関はありません。自家用車の相乗り希望者は、幹事に相談してください。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミもきっと楽しめます。	
5月22日(日)	鶴川河口	鶴川温泉四季の館 駐車場 午前9時30分
	札幌駅発、又は地下鉄大谷地駅各ターミナル発 道南バス浦河行(ベガサス号)「四季の館前」下車。 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。運が良ければ「大当たり」になります。	
5月29日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月4日(土)	平和の滝	平和の滝 駐車場 午後6時30分
	地下鉄琴似駅発 JRバス(西野平和線)「平和の滝入口」下車、徒歩20分。 ヨタカ、コノハズク、マミジロなどの声を楽しみます。夜ならでの探鳥です。懐中電灯や防虫剤の用意を。	
6月12日(日)	東 米 里	東米里小中学校正門 午前9時
	地下鉄菊水駅発 JRバス(米里線)「東米里小学校前」下車。 土地利用のため、かつての草原は随分と荒れてしまいました。オオジシギやカッコウはどうでしょうか。	
6月19日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月24日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月26日(日)	福 移	福移小中学校前 午前9時
	地下鉄環状通東駅発 JRバス(北札幌線)「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。カワセミも期待されます。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>